



頁
14
8151
4



枕言古和歌集卷第十

雑歌

春中意中と云事代

中納言兼捕

春よぬと鳥ふしはたきしにまの月をたきしりけり

前中納言定家

初るは山より言は鈴おく春は霞のまてんは

系御御息所春日社に詣てつげ大和はまの

司よりつて後

躬恒

年毎りあか指の春日也野るま今や春は初るは

三善為連

今日之行あか指之春日也
藤原宗秀

今更に垣根を同一句ひ
梅は凡

流るは竹りける時柳
贈太政大臣

贈太政大臣

東風吹て句ひとをよ柳
中宮大夫公宗

山家詩花といふ事成

中宮大夫公宗

さし度去もうね山里よ人
花を竹

曾祢好忠

後縁山を霞り埋もむ
西行法師

西行法師

多くんを木を花を長より
今更に去よわ

花は竹のしを竹り
成り物

白事かぎり年の二月
初は海く

藤原宗秀

身よりく去はるるの金
花を人

藤原景綱

花は竹を竹り
又は竹り

権律師則祐

本は新納見てきた山保花はなみぬ願ひ白雲

大若りて思ふことか柄は花咲きけり

乃く後々僧正行尊

法友の衣と糸の山保花よりなりけり

如願法師

わきよりと物恨まん山保花を乃く春の形身なりけり

建武貳年内裏千首予り題は後々後々

なりけり時春植物と云ふ事と

兼好法師

久方は雲井長閑な初日乃ひりよ句ふ山保花

重之

世中ハ花より物恨まん山保花を乃く春の形身なりけり

古き詩句と顔あく春後けりけり花散

風雨多と云ふ文頃阿法師

世中ハ花より物恨まん山保花を乃く春の形身なりけり

後宇多院宰相典侍

年沖の初月と思ひ初花を乃く春の形身なりけり

西園寺入道

みづ海より物恨まん山保花を乃く春の形身なりけり

前大僧正良信題体さうりて今年も作りけり

前大僧正實聰

去年は花より梅きて果は冬より春に咲く

小白川の山より花向ひて咲て作りけり

見りて梅して作りけり

右衛門督云任

去年は冬も同り山里の花も宿れり作りけり

津守国助

有る世の浮世より梅より花も春

二品親王覚助

ゆくは冬も梅より花も春も今年も限るは山

去年は梅より梅りて作り

前大納言云任

浮世は春も梅も梅りて山里は梅より作り

藤原春宗

入相の梅より花も梅りて今年も梅も梅り

右衛門院小宰相

梅も梅りて梅りて梅りて梅りて梅りて梅り

大江頼重

去年は梅より梅りて梅りて梅りて梅りて梅り

延和の御付務臺友花十安せきお給けりよ
殿と共仁のこともおはすけりけり

皇太后宮太夫国景

藤原部内八家の言しおみを後さしけり

源宗氏

友花の御おと書と抄より書の別を形身にお見

藤原宗遠

お誦め限と云はれ書毎よとていひおと今お書

正二位知家

世に捨く後人書成情をいひて馬達ぬらりけり

賀茂行幸

おぬおいと書社とゆりれ今書と留り祝も書ん

前大納言為家

身は余の馬と書つる約書けお州をけり物さしおぬ

左近中将具氏

吸ふとぬ命の種よ別ていひの巻ん書けり約後

源重之女

今もぬ交れ家と成りけり深はうとぬおといおん

平時宗

教ぬぬ深心くれの事係花より書しおぬお

三善遠衡

侍傳方心記部郭人乃為也初善也

藤原行朝

ゆてきたるく山海山約末よ乃乃付今乃馬か

山居復興

祝部行親

室うはた体言候て郭云新乃乃山の雲う乃乃り

五月の日業玉体はつあも

前大納言為定

代然て心体も心體の高南系師の川今乃乃行あ

橋

宣政門院

九年のしり一徳を出いいに匂ひか係を折れま

従二位家隆

老乃乃あまこしり一人まわ花橋と神のしりす

前大納言實教

今も打成充あ見身は之きいひ集一雲ありけり

蟬と

権少僧都行顯

取ても行いけ世を室蟬の身体人ある祿社島人

相秀房

我乃乃と祿を乃乃ん室蟬の身体世を祿社島人

安嘉門院右場門代

人志は秋とて思ふに宮中の御成を此物と思ふ也

積人不知

後初め世を頼むに友を自とてし宮婢は鳴きし

千惠法師

昔風よ雲とてのわが行儀海や本宮に御成は夕立に室

惟宗忠景

風流の草橋は川の夕言よ山陰源一日言一は息

静仁法親王

御後川とての早に流よ無く流も浪は島よ

初秋風

前参議経季

昔は秋の葉は秋の風よ源よと秋の影は

前元兵衛督教定

ゆつてをいふなりやぬ神の考の洞よ秋はにけり

藤原朝宗

風は言はぬに吹くぬ葉の影は秋の夕よみたり

権少僧都良仙

世は秋よ信家八人の秋は秋の葉は秋の夕よみたり

後西園寺入道

神の夕よ影は秋の夕よみたり

横花より付くは

栗田関白入道

横井のそよ風の夜はあはれも長はらぬ世にせりては

参議定経

山賊の芝は神田銀の夜はあはれも新のそよ

前大僧正守誉

源草花里はひししは清井の夜はあはれも新のそよ

藤原秀長

何れよよよと研を思ふも秋の夕言

源道濟

古は身は心秋をたふさぐ世をわらふ物や出さるん

前中納言實任

枯果の後をうさぐ花房を移くわらふと何人ぞ

藤原基任

身と心は薄の宿はさう四つわりとや世を島ん

土御門院御製

養造り秋や志のうらんありは枕のりりあり

殿富門院太輔

長衣の女は心秋は養抑をばけよの世に宿

皇太后宮大夫俊成

ちのきらの金すくぬ世にけく秋の月をみか

月あはれ迷懐しき事と

登蓮法師

法友より人いさむるに久月きしきよつらけり

皇太后宮大夫俊成

けせよふかくもあはれ物成神と、初や秋の末月

世体のむしゆり病けは月けあそし物。

前大僧正實超

三波より今年秋の景深る月色けは神をまふ。

亭に常暁更落月と云事成清水寺地蔵院

くちのまきり一人のまよみくすし欠け。

大僧正忠良

はつちくて秋世とあはれ神むし月とすまの病の山は揚

法印法守

なまて今年秋の月とせん今年も秋をま遊けり

秋懐四とらるるを前大納言忠信

老くは遊身は秋まうつわは日しは秋の春の月

度會朝棟

今海よその浮事もさう物秋の心を月より晴し

多々良成見

先より吾人頼みは月よ契ても秋世更秋ははる見

祝部成伸

いはいく母よ月夜思ふと行ゆく月を夜とて
お卿月多事と 法印長壽

故郷思ふなりは難波浮し〜月乃け
月お懐四つ事と

入道前大政大臣

詠の身うそん中よ〜月を
前中納言定家

詠の思ふ事はかくよし〜月
前内大臣

はくく恨意なる宿紙詠れ月かり〜香より乳

今河院近侍

思ふ宿を深は深と来り福を留ぬ物と衣のり

源氏経

露霜は色色の高恨侘々竹の鶴うかり

家以十首予〜菊霜

山階入道前左大臣

拂い新秋もあひも露傳ぬ節の菊のとわ〜

前大納言経繼

胡多は秋もあひも玉霜は白髪を〜竹を言約

源教親

著て約秘の別の道とや

元妙法師

三田山町魚沼のきそぬ

入道前大政大臣

老後よあまのり

續人不知

白浪を右所かや

国九月

源頭氏

限わむ秋の日較と

夜笠内大臣

神を月町多言

藤原基明

定か此物に

從二位家隆

くかり定か此世の年物

從二位宣子

風通ふ籬の萩の

法印長舜

柘枝の霜の下系わり

源具親

玉霜の残の夜の白菊の枝の形見とてみ

正三位隆教

引はけり鏡の影を長かり玉の宿れは成かすねく

前大納言忠源

酒米あまき身は思ふと踏々く世は流りつが

後照念院関白

和歌の博也思ふとあも涙の馬路は多傳の度とまの

式子内親王

はるや風よそく浪のた場の海は根とせよ

雷

前大僧正道昭

雨のぬる道は思ふと白雲の身は世に秋ありも果縁と

権律師仙覚

死のうは思ふと海に雷はみかす山

頓乘法師

ひし思ふと教の白雲はありぬと心と知人と見

大筆少く徳行りけり

前大僧正行尊

入るも雷と波と山海は心とありぬと見人と見世よ

左近中将善成

造り光り此身代歌く後集 雷は年換りけ
述懐百首房中一 炭電

皇太后宮太夫俊成

姻その小ゆ 炭後我うわや歌とけくく下いめん
同の代 寐蓮法師

羽の初ねせよ後海はしるまの春は 姻代金はよふり寺
宣政門院

年打り今をゆぬ物と言ぬり 首代今り思ひあつた
大納言通具

老ぬれ早も年の言り那し 同一月日とわさ
大納言通具

津守国助

今更り年け書しと歩くわあはしるも目較うわさ
大納言通具

流り月日と雷は換りけ 家身物りぬり年の言り
清浦朝臣

はるも今年も今に取はけり 養り換り新よとん那
小督

羽の初ね世のはるか代思ふわあをけり 句し年け書り
土御門院内大臣

何れ又書り年代しるん長よ 巻く身と初ぬれ那

信阿法師

六十箇へ身は思ふくもわも行まはしり年は言ふ那

後宇多院御蒙

と一先も常の心もく約年の心と今毎の身は海もん

世中の心よかぬかすもく約は心

身わく思ふ事多海も人可くわ

大江千里

ちり物め世の中物か水は方流し流わの流身と心

義元百首かなりけり

中納言為藤

さきも思ふけり家山里も心は心その行はる福ん

山家水と

栄仁親王

けしは流し心も山は心は心ありに流も心

山家氏

浄阿上人

のわし流し心も山は心は心ありに流も心

世路も愛わし心も

心海上人

世中と愛えし心も山は心は心ありに流も心

雄運法師

吉中り心も山は心は心ありに流も心

源和氏

名成と心もやけを捨れんゆゑ山の奥に宿る

前権僧正雲雅

此身はひひと知れ大に世あつひも思ふけりか

微安門院一条

御の程を事懸多れ年月は心の方を長はるあま

弘安百首あたりけり

前大僧正隆辨

まろり又しれ凡の道鏡山は道に此程の程を御し

寄老述懐とる事代

前大納言為家

秋くとも鏡の程の朝毎に換りてる雷と浪と

定願法師

夏は世は程志のふか空蟬はうのともうとるけり

任り社りなりけり

入道二品親王尊道

山寺は入をりも程くの程免出りき程の春か

柏秀房

流りけ世と柳や初瀬山禱の春も程ぬ身も

小野小町

頃摩比登の浦漕舟に梶とて入る人を見たり

按察使隆衡

奥山より来た人のまねをよこしを捨る道成なりや

中務卿親王

心算の清世と傳くいふおのけけ山の奥より入

右兵衛督具氏

捨れ山の奥より思ふ身はと海まね物とて入りけり

志の傳ふと云道成なり賤なりとの縁は

と海よりてち成る道成といふと云

後作りけり
紫式部

初め人け来よりの境は山世り物道とてき物とて

小野社分令り曉述懐状

正三位知家

我も又山の場り一多明は月と夜水海路一海り

頃徳院御製

言方同をねむりおとけけりも初め人り令りけり

源俊定朝臣

波物とて清文水より上原の志の先跡見たりけり

頃徳院御哥

清波より背ても又いひせんけ世り川の思ひありけり

関白前大政大臣

つりしを月を果か人毎りたり備れ侍世よりけき

入道二品親王性助

裏かくと侍まけ世の習えぬ御り初てかく欲くふ

九条前摂政右大臣

何事も世に結ぬ思ふおと人の侍りまもまもけり

権北家よりてまうり事侍りけり及て

後行

権中納言俊忠

徳の心の園を晴はり極り里り此の月も

尚侍藤原現子朝臣

此にくよ我り物成思ふか身り利和の此の福

平時元

湯のり草間よ宿り月影のけり御難世と記るわ

奈良地初わわたり成り

後人不知

世中ハ常なり此物と今り家なり此初の梅もわ

前参議雅有

わをまわし今令とるまぬいけと限りを入おの産

源郡長朝臣

警ぬ新々を中りくれき今と関入毎の産

世中はあはれ水よ宿の月とらんく

前大納言云任

世中はあはれ水の月とらんくや流るるもなかりぬか

馬代院の家代と海とつらとめ

西行法師

行ひと多惜まぬ魚見世の身と捨く社をよにわ

人壽百歳七十稀一分衰老一分癡中心二十餘

年事幾多觀樂多悲け侍の心を清く

高辨上人

初起くよらりぬゆりよ八海さうりくして流るる

清少納言

月とらんく身社とらんく流るる心とらんく

院御製

流るる心とらんく身社とらんく流るる心とらんく

前中納言定家

身社とらんく世にりぬ知りてをれ暮かきしわの烟を

前参議俊憲

吸るる心とらんく身社とらんく流るる心とらんく

源光行

吸るる心とらんく身社とらんく流るる心とらんく

暮打くも長世を頼むる後を憂ふ

平政村朝臣

續人不知

山里を把れ淋し半社を造世の深き八位よりけり
今うけつたあつたに宿もか世の深所のくか家も
いふらん思ひの中にもぬかば世の深事れあつらん
新院の作りて百首をたりける時

藤原季通朝臣

影て毛打つて海へ身をふか二をひくすけ世の
入るの御を聞てし終る

和泉式部

夕暮は物と歩み流の表成りも閑ぬ身なりけり
熊野へ海へてけ道ゆく月を今く終る

道命法師

都山へ御し月共往たり様のを空もあけけるか
後拾遺撰くたりける時集のふ後し
くらぬし御とわりしは大納言師賢よ
付く参りて世終る

前大納言為定

今と御集り世のあつた身と照りてま光りけり

御母

後醍醐天皇

よ集る世の命は福也是も親母の光りなり
言世山より行けり以て皇太后宮女侍後出千載
集を撰りてり一冊を御送る行りて

西行法師

花のぬきの葉の如くはあはれもあはれも
皇太后宮大夫俊成

皇太后宮大夫俊成

世に捨て入りてはあはれもあはれも
淡天門院

淡天門院

流るる世もさるる月日かたしと
流るる世もさるる月日かたしと

藤原宗秀

花の深紅葉は深く染められぬ
人の日十九日補經文より記付け

人の日十九日補經文より記付け

讀人不知

人よ高種の毒は長あはれいば
親の取分故に人よ

親の取分故に人よ

掬荷より行けり法師の愛は社より

ちり世のうきもさき事成思へり
ちり世のうきもさき事成思へり

攝政大臣

故郷八津芽の糸よあ果く月
故郷八津芽の糸よあ果く月

西行法師

年月といく親身と送りけん暇は命今分此世よ
支那此命の寄よ深ひ事てありとや唯と又沈る美
并蓮法師

背てもや成深物巻よりけり身成はあわさるの縁
大江嘉言

今酒く八人と歌て書に多りい所身成りあんせん
皇太后宮大夫俊成

世中と思ははる神く神むじりも空よ清く白雪
新少乃身返りぬを聞く素元法師の作

よはうつけ
賀茂重保

朝の露の露身成りあつるよの清よけ今と
式子内親王

篤は初より事成水く先か八初ぬじりいしく海海
藤原元俊朝臣

はらうとも更よ歌むか今を親身成りあつる
大隠在初市といふ事と

権僧正圓經

世成いふ心成りあつる
平親清女

とくよ浮き世の想を思ふ身は恨やまらば

九条前撰政右大臣

何事ぞ代はれぬと思ふあそ人のけしきもあはれ

寄鏡述懐

平時廣

新物も鏡を物と恨ん起す身はうらみかた

世ははるくあけの時程大納言実國の許り

三條入道左大臣

羽のぬき身はなほ驚かす義と余はし聞はぬ

権大納言實國

誰ぞ実深世の憂と去りかゝる驚きもあはれ

題不知

典侍光子

義のり親身より此馬を物と恨ん余はし聞はぬ

章善門院右衛門佐

さ此をのこも海も同一憂は世に余はし驚く身は人集

西行法師

心より物に思つ留て身はうらみかた

花山院御製

けくく世の憂をて年月と換ふはいと多し

権中納言俊忠

去れ花の紅もあはれ身はあはれ

放富門院大輔

去は元亨くはあね秋の月みりてまけぬわのり世

平時直

浮世をいんやとくたれかへゆはの奥成りしうん

法印良栄

何別は後もいめつう福をたけ山里とくは世よりけき

平時長

交非此身を後よりあか物と後れ世知ぬらよりけき

太宰権帥實香

帰のまのぬ言ぬとさけいあけ警ぬ才は果とあきま

法印圓伊

乃れも才は後事と秋しとゆゆ捨ぬけ世よりけり

権大納言資明

誰も家の中かけんさゆあ為、後の墨りや此世よ

春院利花院前関白

墨ししは田んぼよと墨山お朝目も堂よ知らん

後深草院関白太大臣

古内流りしは世よりあかゆのちをたしと梅よりらん

藤原宗秀

心深く身とかくしは世中よりあ果ぬまのけり

從二位爲子

のそに新思のほそあみよ人と恨ん御りせし

藤原貞隆朝臣

用度よ金師の表直つてそちん人あははかおけり

光法之師

のわにたのほ世と多物けいあふ山りあはくはす

覺贈法親王

世すよ一は誰そあつて御り捨らんやとてあは

貫之

まふりあふもろふあてそ知りも去ぬも烟ありけり

世中何りあふんそあてゆり

世あわすいあはゆりけり

源順

世中と何よあふんそあてゆり

如空上人

余社や所頼すの孫あふりあはゆり

権中納言定家

御もまはあは世のあふんそあてゆり

権中納言定家

水乃とよ思のあはすはかふれはてはあはゆり

枕言古和歌集卷第十一

釋教

維摩經よ此身水月如く如く

小辨

常の如く我身ハ水月如く如く世に任じけん事も如く如

常住心月輪如く如く 澄成法師

如く如く如くの中ハ洗及く如く如く如く如く如く如く

舍利講如次てり預成佛道ハ心所人てり

如く如く如く如く如く

関白前大政大臣

余の如く佛の道成りん 却るる 知りたり 終
金剛般若経不應取法 不應取非法

法印定圓

吉野の如く 寺をたて 書を撰む 風を吹
煩惱菩提の心 式子内親王家中將

馬の解の如く ありぬ 氷をぬく 湯をけり

前大僧正公澄 百川の如く 流るる 流るる

けり 事と傳法の如く 事と傳法の如く

權僧正植守

しるる 常と清見 百川の流るる 湯をけり

涅槃經如於鏡中見諸世像の如く

俊秀法師

清く流るる 塵を清く して 垢をぬく

清水觀音御哥

何の如く 幼く 世の中を 朝の如く 花の如く

僧正道順

幼未を 建つ 習ふ 如く 道成り 火ぬく

化城喻品 化化大城 柳

前大僧正慈鎮

思ふ 如く 浮世の如く 果て 宿の奥に 名はけり

若離執忽然歸大我

權大納言教家

心行見口言其地心乃事未滿く執と捨れり神身之けり

每夜座禪觀水月

土御院御哥

胸行乃水をわがくは雨乃水を流りりけり

太上天皇

何は月也のわがぬとあまのま家也の身と思ひりよ

中務卿親王

世は治民とをわがくは礼をそ御法に誠りけり

空觀の心成

法印實伊

心とて美とんをわが見物成悟り河の流りりけり

十如是の心成法成りけり中よ如是性と

後京極攝政大政大臣

海くよすわいにけり世とて法同く月社胸よ流らぬ

本源清淨大圓鏡之心と

法印覺源

曇たぐ心の燈よ梅らんむより法はくことと

在世尋提滅後凡夫同被照攝取光明之心と

圓空上人

曇如人の心と清れ世成じし如くに照る月影
百首予續侍りけり十界の中人界

後京極攝政

夏は毎に月日はく明書て又とえし此身といへん
以觀之昏即昏而朗

前大僧正忠深

村言よくあはれ世に如く如く如く如く如く如く
一念不生

心海上人

草花美し結ぬ先のゆふ八何とぞりけり玉は白く
前大僧正慈鎮

悟りとも外よりしゆんてまひあつてはあはれ
皆與實相不相透背

前大僧正慈鎮

悟り行の如く深ぬわいしゆあまをうふそのは
前内大臣

志し社念の如く濁りしをい海してさひを法はあり
唯議論之由此有諸趣及涅槃證得人心成

推少僧都良信

氷一色同し心ありあまを打ち解るまよをさか
石清水社より終り指く念仏はすを

多く包み社掃りてこれより人作りけりて又
開りひらけしとて人作りて人作り
これ何れも清くよき人なりとてありて又
て神ありて人作りて人作り

昔川の本系くれば埋水流るる約志とて海へ行
同社よ約念仏とて此の事体なりける人
夏よく昔も昔も人作りて人作り

極よ(生れん)奥ふんゆく南之阿弥陀仏とて六心
新変はんば
入道二品親王覚助
その物舟とて清く清く人作りて人作り

是法住法位世間相常住住はん

古より古よりこれありて礼拝し海なり軒は梅の枝

濁は水は心を洗ふとて宿の月はけきなり

源空上人
如清水能清濁はん

法印實聰

位を修むるの心の清くわん濁をこそぬむは水

藥草踰品の心と

法成寺入道前大政大臣

法門雨を普くくく物すわとうふ弟末公のうぶく

涌出品從池而涌出 皇太后宮大夫俊成

池あり庭よりあつ蓮葉のいゝく涌り出たるなりけん

也即是空の心と 膽西上人

隈をたけ月を梅で洗はれ也之室ありつるしりけり

後法性寺入道前園田右大臣のつりけり時

百首分後行りけりよ抄された心成

形部卿頼輔

吾輩此法に字をえきり身へらうき海へゆり沈まん

阿弥陀四十八尊の身徳行りけりよ聞名見佛

皇太后宮大夫俊成

秋凡心領の御雲拂りかかると明の室に月を海へ

光明遍照十方世界

源空上人

月影の心ぬ里へあふれとあふり人の心ありと

千首分後行りけり鏡像と

後宇多院御製

坊鏡梅の影をの雨よりありと心法鏡ありと

圓鏡智心と 後法性寺入道

曇なくみはわらふか悟りてははらひ洗つて後よりけり

信解品此心

藤原宗秀

とらわく迷ひわらふ末にたやうに法に道をわりけり

此方何足駄一聚塵空塵

花園院御製

いふもわらひしもなり後初の浮世に宿り身をたはら

題不知

讀人不知

くかり浮世に宿りて志すぬを胸に運りけり

猶如淨水洗除塵身

前大納言為氏

よめはらりしつちの塵を可し洗ふてわらふ川の水

願蓮法師

濁り水も月を宿りて水にたはらふやうに洗ふ

と人位にたはらひて通ずるはらひ

爰に志然し給けり善賢堂薩けり

法友に一味の雨をくちも松をくちりよるらる

維摩經十喻此身如水中月と云ふ

宮内卿永範

洗ふて濁りもわらふ家を見れば身も水も宿りて

空即是色

前大僧正道玄

長秋の氣を經系もけりてしりもききを後よりけり
高辨上人の殊り後ありけり

行圓法師

その神代珠道よあかきまふもまろ人ありけり

維摩經のり

関白前大政大臣

又書に空の棚の浮雲を義神身は果しをけり

心經

俊成郷

長秋の氣を經系はあきまふもまろきおあをまけり

如實知自心

前推僧正定顯

疑て今とれわあしりまろけりあせを法の誠ありけり

尸羅波羅蜜

後京極

け法をうけてあめりまろまろ長秋照如室ありけり

五戒中乎不妄語戒

惟宗忠景

傳はれあしり思ふとけり法の誠ありけり

如是体と

入道二品親王

色なりは二の道よりあめりまろ長秋のすしあめり

枕言古和歌集卷第十二

神祇哥

度會行忠

源顯氏朝臣

皇天照神此増しとひし今も神一りか

り又八神の海に坊し石清水の山に日向をせん

鴨御祖神此沙分

世中よ物ゆふのふとひの神成頼とねふあそむる

曆應三年六月此以去日此神木山階寺此金堂

る海に坊しけ時吉を坊あり二首の御分

三笠山雲打透さんかさやまのくもをうらとほよふわがも真如まにに月之宴つきのみうたひよまじふか

世中よよ人の淨きよありけりいづれもいづれもまじりけり

静妙法師しやうめうほうし延暦寺えんりやうじ執當しやくたう解却げきやくをまじりけり

日吉ひよし北地きたちを控かへりて御み願ねがひをけり

夏中なつなかよ宝殿たからどの内うちに御み願ねがひをけり

後世のちの事ことを思おもひて長ながけむらむとまじりけり

龜山殿かめやまのどの七百首ななひゃくしゆ平野ひらの代しろ

後宇多院御製ごうすたのいんごみせ

今いまも下した代しろ氏うぢ北きた海うみの潮うしほちりやうやうん新あらた園うゑをま

題たい不ふ知ち

前右近大将頼朝ぜんごうじんたいしやうらんちゆう

石清水いしづみ頼たのむとくふ人ひとまみれえく世よもまじりけり

百首ひゃくしゆ分ぶんりし時とき神かみ御ご

左大臣さだみん

頼たのむか我われみかみ石清水いしづみ流ながれは神かみ代しろ神かみ御ご

春日かすが社やしろの廻まわり廊りやう化けりわたりけり時ときにりん神かみの

はあまの宮みやのひけり

けくも思おもひてけり印いんの善ぜん提だいは乃のちそけり道みち

白人はくじん流ながれは服ふく後ごの事こと

祈いのり下したげの席せきよいされはひの根ねの地ちは水みづ

院いんから成なりりていけり

海より作りけりてはあまのつらみひけ。
沙のしりの所か

いさよきひのう根地水よと海のうは海よりたやま
神徳かゆき
法印頼舜

男山香利照か月移をくまぬ人のらあまを
藤原為守

皆人の初海んを理りよまのぬ道成神やうん
嘉元百首かなり一付河

前右大臣

涌りか神の心をわらうとみも下も川や流初げん

百首か筑さゆ一決り

法皇御製

世成思ふ神と清ちの石清の清見のやわらう
百首か筑さゆ一付神徳かゆき

宗徳院御製

道中色は塵り光とやうけ神と心もまの海ありけき
石清水社よりか合し人い清作りけ付社双月

能蓮法師

石清水清見かゆきの絶ちぬ宿の月人限作りけわ
みあ百首か合し
後鳥羽院御製

初冬あわくを移照宿浪を三日月
心外の手より社ありらひを宿り
ゆるけり事わら多ありて後社頭よりりて塔

祝部成茂

い見うを心と成て照あし曇らぬ神の光りり
神祇と修治給りけり

院御製

鈴鹿門十の浪の三岳を
我身はそめ世成照る
述懐分中よ
前大僧正良信
さりとも後世を海くもわが身よりわたりぬ神の恵を

神祇は方の中り

源清氏朝臣

くみ世に心ひわらる清水の濁るを
称徳天院北御時和氣清光と宇佐宮より
給けり信實り給けり

西海を白浪のちりて何とくすんかりけり
鴨の社に合とく人々徳有りけり

鴨長明

石河や智の心清多わら月流成りて
熊野の海よりりてに志氏れまより

く此等と書付る所て志し一竹あり
法殿のちも一書付る所

読人不知

若代此神を初りんまろの宿、相ひは世の是れ約と書

室居百首等ありけり寄社紙

後嵯峨院御製

石清水の清見んは流しきく神のりひを移毛頼之

神紙はんと流留ありけり

院御製

石清水の清見んは流しきく神のりひを移毛頼之

前大僧正

此神有法神と云わぬハハ成身あり一は末も清し

題不知 法眼源承

曇が此神の之室は陰よりしては後の山の場は月

寄鏡神紙 前大大臣

九章の天照神の紙けり梅が鏡を今も有り

権大納言公蔭

天照の御紙と梅が鏡は後けりまの代は曇わたり

熊の御紙と梅が鏡は後けりまの代は曇わたり

後竹ありけり 源在長朝臣

救くよ身みの原はら新あらたと照あみまみみくく境か下した梅うかかのの成なり

顯あ不な知し

御ご聚あ

皆みな今いまのの心こころををみみけけみみ平ひら依よ神かみのの境か下した墨すみ乃のとと此こゝ行ゆく

辰目冬入音声鏡山

俊成とみなり御ご

ううままくくもも境かのの山やまををとと此こゝくく墨すみ乃のとと此こゝ行ゆく

定家さだけ御ご

中なくくよよううててままりりとと筆ふで山やま思おもふふ心こころをを神かみをを知しりりん

